引用文献

Oxfam International. 2019.〈https://www.oxfam.org/en/press-releases/richest-1-percent-bagged-82-percent-wealth-created-last-year-poorest-half-humanity〉(2019.12.12)

河野正治.『権威と礼節―現代ミクロネシアにおける位階称号と身分階層秩序の民族誌』風響社，2019 年，358 p.

紺屋あかり *

本書は，ミクロネシアのポーンペイ島を事例に，近代国家体制下における首長制に伴う位階称号の秩序形成について，対面的相互行為の分析からその過程を明らかにした民族誌である．何よりも本書を特徴づけるのは，「礼を尽くすこと」，そして「返礼すること」というポーンペイの人々による日々のやりとりに対する緻密な分析である．それゆえ本書は，ミクロネシアという地域への関心に限定されることなく，人々の相互行為に眼差しを向ける多くのフィールドワーカーに開かれた同時代的な民族誌となっている．特に本書の事例は，複層化・多層化する現代社会における新たな関係性の構築という検討課題に対して，議論の場を設けている．具体的にいえば，近代と伝統とが入り混ざる場―コンタクトゾーン―において，対面的相互行為がどのような機能をもつのかという問いに対して，現代のポーンペイ島の事例から，礼節をめぐるやりとりを通じて柔軟にフレームを調整していく様が描き出されている．

筆者は，現代のポーンペイ社会の秩序形成においては，異なる 2 つの政治空間の狭間に立ち現れる異質なものがあり，それらが何らかの「ズレ」を生じさせていると言い当てる．ここではその「ズレ」を「あふれ出し」と呼び，ポーンペイの人々はこの「あふれ出し」を，礼節を図ることによって調整していると分析している．2 つの異なる政治が接触することによって生じるコンフリクトは，19 世紀の植民地時代以後のオセアニア社会に多くみられる普遍的な現象である．そのなかで本書が提示した事例―「名誉を認める」というポーンペイ社会の原理においてコンフリクトを調整する様―は，ポーンペイ社会のもつ個別性／独自性の理解を深化させただけでなく，他地域との比較検討の場を開いている．

本書がとるアプローチは，既存研究―伝統的権威論―とは異なっている．それは筆者が述べるように，本書の目的とするところが，位階称号の秩序，ないしは秩序形成を相互行為の次元から捉え直すことであることと深く結びついている．こうした，ポスト植民地国家における政治力学の図式において首長制を論じるのではないという視座が，本書に示された事例の独自性を際立たせている．

本書は第一部「ポスト植民地時代における位階称号と礼節の技法」，第二部「首長の権威と祭宴のポリティクス」の二部構成で，序論，7 つの章，結論から成っている．各部の間には，間奏「『外国人』から『東京のソウリックへ』―称号をもらうまでの道のり」と

* お茶の水女子大学理学部・京都大学東南アジア地域研究研究所

題された副章が添えられている．もっともこの間奏が本書において大変重要な意味をもつことはいうまでもない．なぜならば，筆者の経験を通じて垣間見られた礼節の場が，臨場感をもって記されているからである．

序論「現代ミクロネシアにおける身分階層秩序の民族誌―本書の視座」では，ポスト植民地時代における伝統的権威を政治言説の問題に還元してきた先行研究に対し，伝統的権威者がさまざまなアクターとの関係性のなかで秩序が形成される過程を解明するという本書の目的が示されている．

第一部（第 1 章から第 3 章）では，祭宴における礼節について「名誉を認める」行為が，祭宴の個別的なコンテクストとの関係においてどのような役割を果たしているのかについて論じられている．ここでは，カヴァ飲料の給仕や物財の再分配，それに伴う称号の呼び上げなどの事例を通じて，現代のポーンペイ社会における身分階層秩序の可視化が試みられている．それら事例の検証を通じて，ポスト植民地時代の多元的な価値基準を生きる島民独自の実践論理として，「名誉を認める」という行為が定位されている．

第二部（第 4 章から第 7 章）では，首長制の儀礼実践の場を事例に，首長の権威（ポリティクス）が「政府の側」や「教会の側」と緊張関係や葛藤を生み出す様が論じられている．ここでは，儀礼的貢納（パン果やヤムイモの初物献上も含め）が脱儀礼化する様―儀礼的貢納が実施される時期がズレ込んでいる現象―に焦点を当て，「ポーンペイの仕事（コミュニティへの奉仕活動や首長への献上などの “礼を尽くす仕事” を総称して呼ぶ．本書では，現金獲得のための仕事を「外来の仕事」と呼んで，それと区別している）」自体が変化していく過程が描き出されている．それら事例の検証を通じては，今日の変容する島社会と，2 つの異なる政治とがせめぎあう規範概念の様相が考察されている．

結論では，ポスト植民地時代のポーンペイ島社会の身分階層秩序が，「慣習の側」と「政府の側」のそれぞれを支えるフレームが互いに関係しながら変化する多様で複雑なものであると説明している．これを筆者は，人類学的な「権威と礼節」という主題に対する独自の礼節論として位置づけている．

名誉とは，逆説的に捉えれば，人々から嫉妬や妬みといった激しい情動を誘う．それゆえ時には他者の敵対心を生み出す危険な装置ともなり得る．しかしながら，ポーンペイ社会においては「礼節の技法」と筆者が呼ぶように，名誉のもつその両義的な側面をその都度使い分けることで，他者との関係性が巧みに操作されている．本書に示されたポーンペイ社会における「名誉の承認」からは，当該地域社会を生きるうえでのたしなみとして，対面的相互行為の価値が見出されており，そこからは創造的な人々の営みを観察することができる．このように本書は，現代社会における対面的相互行為について再考を促す，最良の書である．